

も疑われ、『21世紀のPCB』と呼ばれる。魚による生体内濃縮により、琵琶湖のブルーギルは血液1ccあたり600ナノグラム(ナノは十億分の一)の濃度、と最も高い数値だった。

S

ummer of Love 【sʌmərə(v)lʌv】 サマー・オブ・ラヴ

San Francisco を初めて訪れたのは15年前のこと。目的のHaight-Ashbury地区を歩いてみたが、妙に寂れたイメージに改めて時の流れを痛感した。再訪して感じたのは、今では完全に観光地化が成功し、往年のヒッピー・シーンの香りがほのかではあるが漂っていたことだ。

1967年夏。10万人の若者がコミューンを築き、若者のカウンターカルチャーの花が咲き乱れた。思想的には非政治的であったが、UC.Barkley (*1) を拠点とする学生運動やGolden Gate Parkでのbe-inとも連動しながら"Make Love, Not War," "U.S. out of Vietnam," "Equal Rights for All" など様々なメッセージを掲げていった。こうした人々はTimothy Leary (*2) を信奉し、ドラッグとサイケデリック文化に酩酊しながらJefferson Airplane, Janis Joplin, Greatful Dead, Jimi Hendrixなどの音楽に酔いしれていた。

だが、フラワーチルドレンとも呼ばれるヒッピーたちの夢と希望は、WoodstockやMonterey Pop Festivalをピークとするものの、次第に挫折への道(*3)を辿り始める。

*1 映画"The Strawberry Statement (いちご白書)"の舞台

*2 元ハーバード大学の精神科学者。人工合成による麻薬LSDによる意識革命を説いた

*3 '68年夏にHaight-Ashburyで暴動、'69年夏Sharon Tate殺人事件、同年12月『オルタモントの悲劇』が起こる。



T

ake it easy! 【téikit í:zi】 テイク・イット・イージー

もっともアメリカっぽい表現は?という僕の質問に、研修生のK先生は"Oh, my God!"かな、と答えた。すかさずシルビアが、「Godと言う言葉を使うのは恐れ多いから"Oh, my Gosh"とぼかす人もいるわよ」と教えてくれる。

自分にとって最もアメリカらしくて好きなフレーズがTake it easy!だ。大事な試合の前にガチガチになっている相手に向かって、日本的な「がんばれ!」を投げかけても、かえって逆効果の恐れがある。こんな時には、"Hang in there!"や"Hold on!"よりも、むしろTake it easy式に「(やるだけやったんだから)気楽に行こうよ」という気構えの方が功を奏するかも。映画の字幕を見ていてTake it easyが「がんばれ!」と翻訳されているのを見ると、日米の文化の違いを感じて興味深い。

そうそう、"Break a leg!"(がんばれ)は劇団関係者やスキーヤー御用達のお気に入り表現。"Good Luck!"と激励するとかえってツキが落ちる、というわけか。由来はドイツ語表現("Hals und Beinbruch" = "break your neck and leg")からとか、或いは片足を失って尚も素晴らしい演技で人々を魅了したフランス人女優サラ・ベルナール(Sarah Bernhardt)からとか、諸説あり。

補足;シルビアは人を落ち着かせる時、"Mellow out."と口にする。"Calm down.," "Chill out.," "Relax.," "Take a pill."などの表現もある。